

**高齢者のための生きがい対象尺度の開発と
信頼性・妥当性の検討
- 生きがい対象と生きがいの型の測定 -**

長谷川明弘¹ , 宮崎隆穂² , 飯森洋史³ ,
星旦二⁴ , 川村則行⁵

¹ 金沢工業大学 ² 新潟青陵大学短期大学部 ³ 飯森クリニック ⁴ 首都大学東京
⁵ 国立精神神経センター・精神保健研究所心身医学研究部

日本心療内科学会誌

Vol. 11 2007 ,pp5-10

心療内科学会誌

Japanese Society of Psychosomatic Internal Medicine

高齢者のための生きがい対象尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

- 生きがい対象と生きがいの型の測定 -

長谷川明弘¹，宮崎隆穂²，飯森洋史³，
星旦二⁴，川村則行⁵

¹ 金沢工業大学 ² 新潟青陵大学短期大学部 ³ 飯森クリニック ⁴ 首都大学東京
⁵ 国立精神神経センター・精神保健研究所心身医学研究部

要旨：「生きがい」という言葉は、日本独自の意味を持ち、その曖昧さから定量化することは困難を伴っている。最近になり「生きがい」そのものの定量的な研究が多数報告されている。本研究の目的は、高齢者のための生きがい対象尺度を作成し、その特徴を明らかにすることである。調査対象者は静岡県中川根町の在宅65歳以上の高齢者605名に質問紙を郵送し、回答に不備の無かった424名のデータを使用した。信頼性と妥当性を検討し、24項目からなる生きがい対象尺度が構成された。生きがい対象は、5つの生きがいの型に分類し検討した。1)低得点、2)現在低得点・家族高得点、3)次世代と過去の人間関係高得点、4)高得点、5)次世代低得点・現在と未来の人間関係高得点である。生きがい対象尺度は、「生きがい」を定量化する尺度として有効であるだけでなく、生きがいの型による差異を表す尺度としても有用な可能性が示唆された。

索引用語：生きがい対象尺度、生きがいの型、時間軸、家族世代、日本独自

Construction of IKIGAI Objects Scales

- Measuring IKIGAI objects and type of IKIGAI -

Akihiro Hasegawa¹, Takao Miyazaki², Hirofumi Iimori³,
Tanji Hoshi⁴, and Noriyuki Kawamura⁵

¹ Kanazawa Institute of Technology ² Niigata Seiryu University Junior College ³ Iimori Clinic ⁴ Tokyo Metropolitan University
⁵ National Institute of Mental Health, and National Center of Neurology and Psychiatry, Division of Psychosomatic Research

Abstract: The purpose of the present study is to develop a IKIGAI Object Scale and to examine its features. The term "IKIGAI" in Japanese is difficult to express exactly in foreign languages. It includes various concepts. The counterpart of the word "IKIGAI" in English does not exist. However, IKIGAI is similar to self-actualization, meaning of life, purpose in life, subjective well-being, life satisfaction, and morale. Recently a few researchers in Japanese report studies in using original scale of IKIGAI. Participants were 424 people aged 65 years and over who were living at Nakakawane-cho in Shizuoka Prefecture. The main results follow. (a) A 24-item IKIGAI Object Scale was developed. Its reliability and validity was confirmed. (b) Five-cluster of IKIGAI object was discussed. Clusters includes the types which show 1) low scores, 2) low scores in present human relations and/or high family scores, 3) high scores in descendants and past human relations, 4) high scores, and 5) low scores in descents and/or high scores in present and future human relations. This scale has a notable character, not only measuring IKIGAI but also revealing a difference of IKIGAI type.

keywords : IKIGAI Objects Scale, type of IKIGAI, tense, family generation, Japan original

受付：2006年9月7日 / 受理：2006年11月13日

はじめに

21世紀になり個人が健康で「生きがい」を持って生活を送れるような高齢社会を実現することが課題となっている。神谷¹⁾は、「生きがい」とは何かにも日本語らしいあいまいさと、それゆえの余韻とふくらみがある。それは、(中略)ひとくちにはいい切れない複雑なニュアンスを、かえってよく表現しているのかもしれない」と述べている。生きがいを定量化することは、生きがいという言葉の曖昧さ¹⁾から困難を伴っている。この課題を乗り越えるために1980年代になると主観的幸福感(Subjective Well-being)²⁾や生活満足度(Life satisfaction)³⁾、モラル(morale)⁴⁾といった生きがいと類似していると考えられる海外の概念を使用する方法が国内で広く受け入れられ、その構造や関連要因が検討されてきた⁵⁾。

21世紀に入って「生きがい」そのものの定量的な研究が報告されている。長谷川ら⁶⁾は、神谷¹⁾にならって「生きがい」を日常語であると想定した上で調査に使用し、生きがいの有無を尋ねて関連要因を地域別に検討した。近藤ら⁷⁾は、「生きがい」そのものを測定する目的で16項目から構成される「生きがい感尺度」を作成し、生きがい感を操作的に定義した。長谷川ら⁵⁾は、「生きがい」を、「今ここで生きているという実感、生きていく動機となる個人の意識」と定義し、神谷¹⁾にならって生きがいの構成要素を大きく2つに分けて、見田⁸⁾の時間軸の視点と上述した海外における類似概念を含めた国内の研究結果と近藤ら⁷⁾の知見を取り入れた新たな「生きがい」構造モデルを提案した。図1は、自己、すなわち主体が今ここに存在し、「生きがい」が生じてくる対象、つまり「対象」とそこから生ずる気持ち、すなわち「伴う感情」の2つが「生きがい」の構成要素とした「生きがい」構造モデル⁵⁾である。長谷川ら⁹⁾は、共分散構造分析を用いて「生きがい」構造モデル⁵⁾が高い適合度を有することを示した。しかし「生きがい」構造モデル⁵⁾は、「生きがい」対象を想定しているものの、その測定に関する計量心理学的検討が十分にされてきたわけではない。

本研究の目的は、高齢者のための生きがい対象尺度を作成し、その特徴を明らかにすることである。



図1 生きがいの構造モデル(長谷川ら,2004)

研究

(1)目的と方法

生きがい対象尺度を開発し、その信頼性・妥当性の検討を行うことを目的とした。

調査時期と対象は、2002年春に静岡県中川根町在宅65歳以上の高齢者605名に研究手続きならびに目的に関する説明文書と社会的支援や心理社会的な質問項目や人口学上の項目を含んだ質問紙を郵送し511名(男性232名、平均73.2 ± 5.9歳、65-93歳、女性279名、平均73.7 ± 7.5歳、65-96歳)から回答を得て(回収率84.4%)、「生きがい」対象の項目の回答に何らかの回答をしていた424名(男性197名、平均73.0 ± 6.1歳、65-93歳、女性227名、平均73.7 ± 6.83歳、65-96歳)のデータを使用した。本調査の4ヶ月後に記入漏れが少ない187名(男性101名、平均72.0 ± 5.3歳、65-85歳、女性86名、平均72.9 ± 7.3歳、65-91歳)の参加者に質問紙を再度配布し、85名分が回収され(回収率45.4%)、不備のなかった59名分(男性33名、平均71.6 ± 5.2歳、65-85歳、女性26名、平均72.8 ± 6.00歳、65-88歳)を信頼性の検証に用いた。

「生きがい対象調査項目」は、「生きがい」となる程度について、「生きがいになる」から、「どちらかといえばなる」、「あまりならない」、「まったくならない」までの4件法で尋ねた。「生きがい対象」に関する質問項目は、先行研究⁵⁾を参考にして著者らで協議して決定した。配偶者、子ども、健康、趣味、過去の自分自身の状態、未来の自分自身の状態といった時間軸を取り入れた25つの質問項目を因子分析に投入した(投入した項目は表1参照)。

表1 現在,過去,未来の生きがい対象

測定変数	プロマックス回転後					共通性
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	
過去の親の状態	0.844	0.060	-0.191	-0.039	-0.025	0.543
過去のきょうだいの状態	0.776	-0.040	0.072	0.026	-0.061	0.630
過去の友人・知人の状態	0.702	0.081	0.215	-0.225	-0.092	0.630
過去の自分自身の状態	0.681	0.036	-0.014	-0.036	0.062	0.492
過去の配偶者の状態	0.648	-0.056	-0.164	0.131	0.300	0.576
過去の子どもの状態	0.557	-0.182	0.122	0.392	-0.009	0.667
過去の孫の状態	0.519	-0.125	0.128	0.382	0.020	0.649
きょうだい	0.274	0.196	-0.035	0.140	0.032	0.211
健康	-0.081	0.699	-0.056	0.111	0.114	0.505
仕事	-0.009	0.682	-0.007	0.037	0.033	0.482
趣味	0.077	0.646	-0.027	0.026	0.003	0.455
社会的役割	-0.055	0.609	0.109	-0.016	0.026	0.422
家庭内の役割	-0.062	0.602	0.040	0.141	0.072	0.441
友人・知人	0.292	0.436	0.089	0.049	-0.115	0.425
その他の家族・親類	0.072	0.430	0.064	0.063	-0.066	0.249
未来の孫の状態	-0.198	-0.043	0.863	0.242	-0.033	0.651
未来の子どもの状態	-0.138	-0.071	0.782	0.243	0.032	0.615
未来の友人・知人の状態	0.226	0.125	0.687	-0.188	-0.115	0.674
未来のきょうだいの状態	0.136	0.035	0.653	-0.012	0.004	0.582
未来の役割	-0.007	0.196	0.480	-0.101	0.063	0.365
未来の自分の状態	0.122	0.023	0.424	-0.186	0.358	0.527
子ども	0.016	0.171	-0.042	0.693	0.020	0.552
孫	-0.036	0.136	0.114	0.623	-0.052	0.461
未来の配偶者の状態	-0.032	-0.053	0.300	-0.089	0.758	0.787
配偶者	0.047	0.168	-0.146	0.076	0.507	0.307

主因子法を用いた

(2)結果と考察

因子分析は、主因子法を用いたプロマックス回転によって因子を抽出した。因子負荷量の絶対値が0.40以上を示した項目を参考にして、5因子が妥当な因子数であると解釈した。因子分析の結果の因子パターンを表1に示した。因子間の相関は、いずれも0.41-0.64の間をとり、高い相関を持っていた。

第1因子は、14)過去の親の状態、17)過去のきょうだいの状態といった項目に負荷量が高く「過去の人間関係」と命名した。第2因子は、7)健康、9)仕事といった項目に負荷量が高く「現在の状態と役割」と命名した。第3因子は、22)未来の孫の状態、21)未来の子どもの状態といった項目に負荷量が高く「未来の人間関係」と命名した。第4因子は、2)子ども、3)孫に負荷量が高く「現在の子どもと孫」と命名した。第5因子は、20)未来の配偶者の状態、1)配偶者に負荷量が高く「配偶者(現在と未来)」と命名した。なお以下の手続きでは、4)きょうだい因子分析の中で因子負荷量の絶対値が0.40以下となっていたことから除外して信頼性と妥当性の検討を行った。

(3)信頼性と妥当性

信頼性の検討のためには再検査信頼性ならびに内的一貫性の指標を用いた。係数は第1因子から第5因子まで順に0.89、0.83、0.86、0.69、0.63となり全体で0.92となった。再検査信頼性は初回調査と再調査の間の相関が0.55と十分な値とはいえなかつ

た。一方24項目のI-T相関が0.4から0.7の値を取り、十分に高い内的整合性を有すると考えられた。

妥当性の検討のためには、老研式活動能力指標¹⁰⁾(以下、老研式)、高齢者うつ尺度短縮版(Geriatric Depression Scale短縮版:以下GDS)¹¹⁾、生きがい感尺度⁷⁾を同時に測定した。

併存的妥当性に関しては、生きがい感尺度と0.54と中程度の相関を示した。生きがい感尺度は、本尺度と同じく「生きがい」そのものを測定するために開発されており、今回開発した高齢者のための生きがい対象尺度が生きがいそのものを測定している尺度として妥当性が高いことが示唆された。一方、GDSとの間には-0.34と負の相関となり、老研式とは、0.23と相関があまり認められなかったことから、高齢者のための生きがい対象尺度とGDSの間、高齢者のための生きがい対象尺度と老研式の間それぞれ併別の妥当性がみられることを確認した。

また因子的妥当性は、見田⁸⁾の時間軸の視点からは過去、現在、未来の3因子となることが予想されたが本研究で5因子となった。これは、生きがいには家族の存在⁹⁾だけでなく、時間軸や家族の世代による違いといった要因を反映している可能性が推定された。

以上から、今回開発された高齢者のための生きがい対象尺度は、妥当性ならびに信頼性がある程度高いことが推定された。

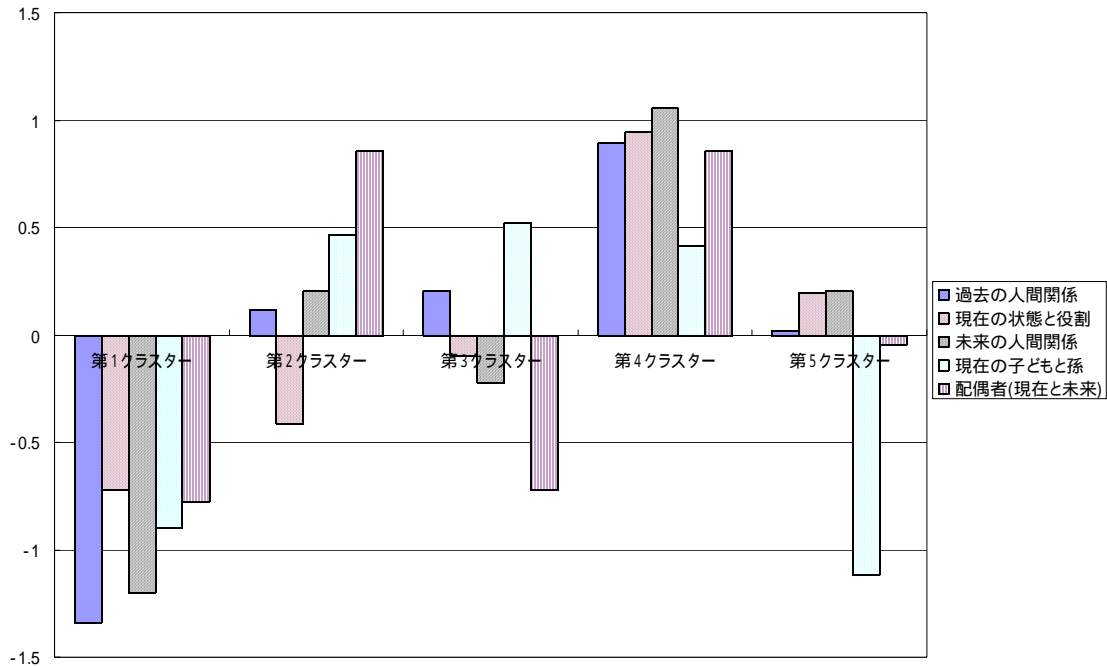


図2 5つのクラスターと生きがい対象の因子負荷量平均

研究

(1)目的と方法

研究で開発された生きがい対象尺度について個人差の検討を行うことが目的である。対象は研究で用いたデータ 424 名の中から、分散分析に使用した変数の回答に不備の無かった 224 名(男性 112 名、平均 72.5 ± 5.1 歳、65-86 歳、女性 112 名、平均 73.3 ± 7.56 歳、65-96 歳)を用いた。分析は、生きがい対象尺度の 5 つの因子負荷量を変量とし、項目間の相関係数に基づいたグループ間平均連結法によるクラスター分析を行った。距離係数 4.033 で回答者を 5 つのクラスターに分類した。クラスターを独立変数とし、老研式の下位 3 項目、GDS、生きがい感尺度の 5 変数を従属変数とした 1 要因多変量分散分析を実施した。

(2)結果

クラスター分析の結果は以下の通りである。図 2 には、クラスターと生きがい対象の因子負荷量平均が示してある。第 1 クラスター(43 名：男 17 名、女 26 名)は、生きがいになる程度について全体的に低い群であった。第 2 クラスター(42 名：男 27 名、女 15 名)は、配偶者を特に生きがい対象とした。第 3 クラスター(56 名：男 20 名、女 36 名)は、子どもと孫を特に生きが

い対象とし、他の群と比べて過去志向の群であった。第 4 クラスター(62 名：男 39 名、女 23 名)は、生きがいになる程度について全体的に高い得点群であった。第 5 クラスター(21 名：男 9 名、女 12 名)は、特に子どもと孫が低い得点となった。

1 要因多変量分散分析の結果は、以下に注目すべき結果のみ記す。表 2 には、各変数におけるクラスター毎の平均値と標準偏差が示してある。社会的役割における主効果は有意差が認められた ($F(4,219) = 5.548, p < .01$)。主効果に有意差を認めた場合、事後検定として Bonferroni 修正法による多重比較を行った(以下 内は有意水準を示す)。第 1 クラスターの平均値は、第 2 クラスターならびに第 4 クラスターの平均値よりも有意に小さく 共に $p < .01$ 、第 5 クラスターの平均値よりも有意に小さかった $p < .05$ 。生きがい感尺度における主効果は有意であった ($F(4,219) = 14.616, p < .01$)。第 4 クラスターの平均値は、第 1 クラスター、第 2 クラスター、第 3 クラスターの平均値よりも有意に大きく $p < .01$ 、同じく第 5 クラスターの平均値よりも有意に大きかった $p < .05$ 。一方、第 1 クラスターの平均値は、第 2 クラスター、第 3 クラスターの平均値よりも有意に小さく $p < .01$ 。同じく、第 5 クラスターの平均値よりも有意に小さかった $p < .05$ 。

表2 各クラスタ毎の平均値とクラスタ間の比較

		上段:平均, 下段:標準偏差					主効果 自由度(4,219)	事後検定 Bonferroni
		第1クラスタ n=43	第2クラスタ n=42	第3クラスタ n=56	第4クラスタ n=62	第5クラスタ n=21		
手段的自立	5点満点	4.163 .162	4.857 .163	4.571 .142	4.790 .135	4.667 .231	F=2.969*	1<2*, 1<4*
知的能動性	4点満点	3.140 .135	3.619 .136	3.518 .118	3.694 .112	3.667 .193	F=2.866*	1<4*
社会的役割	4点満点	2.953 .140	3.667 .141	3.411 .122	3.710 .116	3.762 .200	F=5.548**	1<2**, 1<4**, 1<5*
GDS短縮版	15点満点	6.070 .430	4.476 .435	4.464 .377	3.371 .358	4.381 .616	F=5.815**	1>2†, 1>3†, 1>4**
生きがい感尺度	32点満点	18.837 .902	23.786 .913	23.518 .791	27.774 .751	23.381 .291	F=14.646**	1<2**, 1<3**, 1<4**, 1<5†, 2<4**, 3<4**, 4>5*

**:p<.01, *:p<.05, †:p<.10

総合考察

(1)生きがい対象尺度の特徴

本研究では、高齢者のための生きがい対象尺度を開発し、研究においてその特徴を明らかにしようと試みた。研究において生きがい対象を個人レベルで5つのクラスタに分類した。ここでは便宜上、各クラスタの特徴によって生きがい対象の型を命名することにする。第1クラスタは、低得点型(1:以下クラスタ番号を付記)、第2クラスタは、現在低得点・家族高得点型(2)、第3クラスタは、次世代と過去の間関係高得点型(3)、第4クラスタは、高得点型(4)、第5クラスタは、次世代低得点・現在と未来の間関係高得点型(5)と命名した。すべての因子得点が高いつまり生きがいになる程度が高いと考えられる高得点型(4)の得点は、生きがい感尺度において最高得点となり、他のクラスタとの間に統計学的に有意差を認めた。同様に低得点型(1)が全クラスタの中で一番低く、他のクラスタとの間に有意差を認めた。生きがい対象の型の違いにより生きがいそのものを測定するために開発された生きがい感尺度の得点差に有意差を認めた。この点から高齢者のための生きがい対象尺度は、生きがいを定量化する尺度として有効であるだけでなく、生きがいの型による差異を表す尺度としても有用な可能性が示唆された。

生きがい対象になる程度の高低つまり生きがいの型による違いによって老研式やGDSといった高齢者のQOL(Quality of Life)を測定する尺度の得点に差が生じた。このことから本尺度はQOL測定にも有用

な尺度と考えられる。

クラスタ間の比較を検討した中で、老研式の下位項目である社会的役割の得点の差について、クラスタ間の得点に有意差が生じた理由には、ある項目が生きがい対象として低い得点でも、他の項目で生きがい対象として高い得点になっていれば、個人の中で生きがいのバランスをはかり、総合的にQOLの社会的役割が保たれる可能性が示唆された。

(2)生きがい対象尺度の可能性と検証すべき課題

本尺度の利点は、生きがいを定量的に示せることである。生きがい対象尺度は単独で用いることも集団で実施する調査に含めることも十分可能であると考えられる。例えば、単独で用いる場合に、回答者の過去から現在に至る生育歴と本尺度の回答内容を照らし合わせることで効率的に情報収集をすることが可能となろう。一方で集団調査で使用する場合には、例えば、生きがいづくり事業といった自治体の施策に役立てられる資料を蓄積し、プログラム改善にも有効な情報を提供する道具となる可能性が示唆された。

また本尺度の外的妥当性を高めるために使用していく中で、回答者を5つのクラスタでどのように分けるのが妥当なのか、各クラスタに分類する得点を具体的に示す研究が必要となろう。

(3)本研究の限界と今後の展開

本尺度開発において再検査信頼性に用いた相関の値が0.55となった。これは十分な値といえない。調

査に用いた 424 名から再検査信頼性を検証した 59 名の間のプロフィールは大きく変わらないものの、4ヶ月の調査間隔をおいたために回収率が低くなり、標本に偏りが生じたのがその理由と考えられる。

一方で高齢者のための生きがい対象尺度は、個人から集団へ、また集団から個人へとどちらにも有用なデータを提供しうる尺度となる可能性がある。今後は、国内で使用されてきた既存の尺度との併存的妥当性の検討も必要となろう⁵⁾。地域特性に注目して生きがいの関連要因を検討した長谷川ら⁶⁾は、家族構成の要因の大きさが農村地域の特徴であることを示した。本研究での調査地域はお茶の生産地である農村地域であるため家族の要因が大きくなった可能性も考えられる。家族要因の大きさについては、他地域の調査によって検討することが必要となろう。

おわりに、本論では、高齢者のための生きがい対象尺度の開発とその特徴を示した。生きがいを定量化する研究は、生きがいの規定要因を解明するための準備段階にすぎない。本研究からは、時間軸と家族世代による違いが「生きがい」の 1 つの特徴となりうることを示唆できたものの、これを日本独自とされる生きがいの特徴とする⁷⁾には不十分であり、地域特性の影響も含めて今後も検討していく必要がある。

文 献

- 1) 神谷美恵子：「生きがいについて」．みすず書房，東京(1980)．
- 2) Larson, R : Thirty Years of Research on the Subjective Well-Being of Older Americans, Journal of Gerontology, 33 : 109-125(1978) ．
- 3) Neugarten, B, Havighurst, R, and Tobin, S : The

Measurement of Life Satisfaction, Journal of Gerontology, 16 : 134-143(1961) ．

4) Lawton, M.P : The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale ; A Revision, Journal of Gerontology, 30 : 85-89 (1975) ．

5) 長谷川明弘，藤原佳典，星旦二：高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察；生きがい・幸福感との関連を中心に，(星旦二編)高齢者の健康特性とその維持要因, 17-51, 東京都立大学出版会，東京(2004) ．

6) 長谷川明弘，藤原佳典，星旦二 他：高齢者における「生きがい」の地域差；家族構成、生活機能ならびに身体状況との関連，日本老年医学会雑誌, 40 (4) : 390-396(2003a) ．

7) 近藤勉，鎌田次郎：高齢者向け生きがい感スケール (K-I 式) の作成および生きがい感の定義，社会福祉学, 43(2) : 93-101(2003) ．

8) 見田宗介：現代の生きがい；変わる日本人の人生観，日本経済新聞社，東京(1970) ．

9) 長谷川明弘，藤原佳典，星旦二：「生きがい」の構造；「生きがい」の対象と伴う感情の共分散構造分析，日本ケアマネージャー学会誌, 2 : 65-79(2003b) ．

10) 古谷野亘，柴田博，中里克治 他：地域老人における活動能力の測定；老研式活動能力指標の開発，日本公衆衛生雑誌, 34 : 109-114(1987) ．

11) 矢富直美：日本老人における老人用うつスケール (GDS) 短縮版の因子構造と項目特性の検討，老年社会科学 16 : 29-36(1994) ．

連絡先：長谷川明弘(金沢工業大学)

〒 921-8501 石川県石川郡野々市町扇が丘 7-1

TEL:076-248-1100 / FAX:076-294-6731

e-mail : hasegw_a@neptune.kanazawa-it.ac.jp

回答者氏名 _____

年齢: _____ 歳 性別: 男・女

問1. 生きがいについて: あなたの今のお気持ちをお伺いいたします。

「生きがい」には、現在における事柄だけでなく、
 現在において過去や未来の事柄をどのように
 とらえているのかという側面も含まれます。
 各々の項目について、どれか一つにをつけてください。
そして()には具体的な内容を応えてください。

質問が多くなっていますが、
 ごめんでも全部の質問にお答えください。

		4	3	2	1
		「生きがい」になる	どちらかといえばなる	あまりならない	まったくならない
(1)	配偶者	4	3	2	1
(2)	子ども	4	3	2	1
(3)	孫	4	3	2	1
(4)	その他の家族・親類(具体的に誰ですか)	4	3	2	1
(5)	友人・知人	4	3	2	1
(6)	健康(誰の健康ですか)	4	3	2	1
(7)	趣味(具体的に)	4	3	2	1
(8)	仕事(具体的に)	4	3	2	1
(9)	家庭内の役割(具体的に)	4	3	2	1
(10)	社会的役割(具体的に)	4	3	2	1
(11)	過去の自分自身の状態	4	3	2	1
(12)	過去の配偶者の状態	4	3	2	1
(13)	過去の親の状態	4	3	2	1
(14)	過去の子どもの状態	4	3	2	1
(15)	過去の孫の状態	4	3	2	1
(16)	過去のきょうだいの状態	4	3	2	1
(17)	過去の友人・知人の状態	4	3	2	1
(18)	未来の自分自身の状態	4	3	2	1
(19)	未来の配偶者の状態	4	3	2	1
(20)	未来の子どもの状態	4	3	2	1
(21)	未来の孫の状態	4	3	2	1
(22)	未来のきょうだいの状態	4	3	2	1
(23)	未来の友人・知人の状態	4	3	2	1
(24)	未来の役割(具体的に)	4	3	2	1